
僕の家のメイドさん

天見酒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の家の子供さん

【Nコード】

N13120

【作者名】

天見酒

【あらすじ】

僕の家にはメイドが居る。漫画やアニメに出てくるようなメイドさんじゃない。特別美人な訳でなければ、特別凄い訳でも無いメイドさん。

そんな普通なメイドさんと普通な中学生のちょっぴり切なく、ちょっぴり楽しい物語

*当作品はフィクションです。実在する人物・団体とは何の関係も

ありません

メイドさんと僕の日常

僕の家には住み込みのメイドさんが居る。

これがアニメや漫画ならば、ゴシック風な洋服を身に纏う凄く万能なボンキュボンな超絶美人な大人のお姉さんか、思わず萌え〜と叫びたくなるドジな超絶可愛いロリっ娘。

「坊っちゃん。そろそろ期末テストがお近いんじゃないですか？」

土曜日の午後の一時を、刑事ドラマの再放送を見て、有意義に過ごしている僕に、不粋な質問が飛ぶ。諦めが肝心って素晴らしい言葉を知っていますか？僕は無駄な努力はしない主義です。

掃除機を抱えた僕の家のメイドさん。どちらかというと、先に述べた大人なお姉さんに属するのだろうが、普通にそこの洋服量販店で売っている私服。ボンキュボンと言うよりは、キュボンキュと言う感じで、最近お腹のお肉がお気になる年頃の四十路のお姉さん、おばさん。勿論、万能とは言い難い並みの家事の腕である。料理は舌が蕩けるほど上手いと言う訳でもなく、舌が腐るほど不味いと言う訳でも無いし、窓のサッシの塵一つ残さない徹底した掃除なんてしやしないし、ドジっ娘特有の掃除と偽る破壊行為を行う事も無い。

「リビングを掃除したいのですが、宜しいですか？」

今から、タイトルの割には全然はぐれていない純情なおじさん刑事が、犯人にお涙頂戴の説得をする少し良いところなんだ。と、家での立場がこのメイドより低い坊っちゃんが言える筈も無く。僕は泣く泣く、休日を家でゴロゴロと凄くサラリーマンのお父さんが、奥さんに邪魔だと追い払われるように、二階の自室に向かうのでした。

過程は間違っていないのだ。それなのに、解答ではXは5になり、Yは3になる。僕の長き探究の末に至ったXはこの解答の通り。しかし、Yは1となっている。うん、このそこそこ厚い問題集を作るのが人間なら、ひらひらな解答を作るのも人間だ。間違いがないとは言いい切れない。そういう事にして、真相は闇に葬ろう。しかし、この問題にも間違いはある。この問題を解けたところで、僕が将来、食塩水の濃度を計算する事があるだろうか？いや、そんな将来は全然想像出来ない。だから、僕がこの問題が解けなくても宜しいのだ。

「坊っちゃん、入りますよ。アラッ、本当に試験勉強をなさってる珍しい」

ノックをして、僕の応答を聞いてから入りなさいと、偉そうな事は言えない。彼女の両手はポテチとオレンジジュースを載せたお盆で塞がっているからだ。うむ、ご苦労。褒美に試験勉強ではなく、明後日提出の宿題をやっている事は秘密にして、珍しがらせといてやろう。

「坊っちゃん、此所、間違ってますよ」

ご主人様の誤ちを記す極秘ノートを勝手に覗き見る、なっちゃんないメイド。

解答の方が正しい事は分かっていますよ。僕の崇高な頭脳でも解けない問題はあるのです。「坊っちゃん、何故、この途中式の+1は移行されているのに、-1になって無いのですか？」

アッ！そんな罠が仕組まれていたのか。僕とした事がまんまと引っ掛かってしまったぜ。おお、Yが遂に念願の3へとランクアップだ。良くぞ、窮地を救ってくれた礼を申すぞ。大学生時代は家庭教師の

バイトをしていたと言っただけの事はある。

「坊っちゃんは頭は宜しい方なんです。もう少しだけ見直しをすれば、数学で赤点を取ることも無くなりますよ」

仰る通りです。数学の先生にも同じ事を言われました。

「さてと、洗濯物を取り込んで、お夕食の準備をしませんと。今夜は坊っちゃんの頑張りに応じて、坊っちゃんの大好物のハンバーグにしましょう。だから、お勉強、頑張つて下さいね」

元々、ハンバーグにするつもりだった癖に。それに別に僕はハンバーグが好物じゃない。勝手にメイドさんが好物だと思っているだけだ。別に嫌いでも無いけど。

まあ、これが僕と、少しぐらいは自慢出来るかもしれない良きメイドさんの特別な事の無い平凡な日常だ。

メイドさんと僕の誕生日

今日は僕にとって記念すべき日。今日で僕は十三歳になる。

学校では、友達に祝いの言葉を言われたが、別にそれほど嬉しくも何とも無い。プレゼントを殆ど僕と財政状況の似て金欠な中学生の友達にねだっても出てくる訳も無く、だからと言って、邪険に扱う訳にもいかず何だか気まずくありがとうとだけ返す、どうって事の無い日だ。

僕はもう中学二年。誕生日ぐらいではしゃぐのは、小学生まで。僕も少しは大人に近付いているんだ。

その大人心を察してくれないメイドさん。夕食の席に並ぶフライドチキンに、手巻き寿司、僕の大好物認定のハンバーグに、ワンホールの手作りバースデーケーキ。明日の夕飯に今日の残り物が出ることに間違い無しの量。

「さて、坊っちゃんのバースデーパーティーを始めましょう!」

祝われる僕よりも、メイドさんがはしゃいでる。ここまでやって貰った親切を僕がつまらなそう顔をして無下にするわけにはいけないから、大人の配慮として仕方なく、このささやかな祝いの宴を楽しむでしょう。それに大人になっても誕生日を祝われるのは、まあ、嬉しいもの何だろう。

「すいません。本来なら口ウソクを吹き消して貰うところ何ですが、買い忘れちゃって。でも、坊っちゃんも、もう口ウソクを吹き消して喜ぶ御歳では無いですよね」

笑いながら、ケーキを切り分けるメイドさん。

うん、別にロウソクの火を消して何が楽しいんだって思う年頃です。

「あつ、旦那様は今日もお仕事で遅くなるそうですが、バースデーカードを頂いてますよ。読み上げましょうか？」

エプロンのポケットの中から出てきた一枚の四角い洋風便箋。

チキンに食らいついていた僕は、絶対に読まれたら恥ずかしい内容だろう中身の読み上げはお断りして、一応父さんからのバースデーカードを受け取って置く。

父さんは結構こういうイベントには律儀で良い父親であろうとする。別に息子の誕生日祝いに出来なく、メッセージすらも贈らなかつたからと言って、僕は嫌いになつたり、グレたりはしないのだが。貴方の息子は、父さんが僕の為に汗水垂らして夜遅くまで働いてくれている事をしっかり理解している良き息子なのです。

「それで！こっちは私からのプレゼントです」

貰った包みの中から出てきたのは、真新しいヘアブラシにヘアクリームにヘアワックス。

「そろそろ坊っちゃんも身だしなみに気を使い出す時期かと思いまして」

含み笑うメイドさん。これは、僕が毎朝こっそりと父さんの整髪剤をくすねてるのを知ってるな。有り難く受け取ってあげるから、そのしたり顔をおやめなさい。

満更、悪くなかったメイドさんプレゼンツの誕生会を終えて、自室に戻った僕。父さんからの手紙を開く。入っていたのは二枚の紙。冒頭部分は去年と殆ど同じ文。

『遼太。誕生日おめでとう。プレゼントを用意したかったが、父さん、お前が何が欲しいか分からないからこれで好きな物を買いなさい』

メッセージと同封されていたもう一枚の紙。日本人に大人気な福沢諭吉さんの描かれている月収三千円という僕にはレアな紙切れ。現金な僕としては変な物を贈られるより、よっぽど嬉しいです。お父様、有り難うございます。

『父さんは仕事が忙しくて誕生日と一緒に祝ってあげられない。ごめんな。母さんが居なくなっってから、仕事ばかりでお前を一人残して全く構ってやれずに寂しい想いをしていると思う。本当にすまん』

息子の事を想う良い父親ですね？

でも、心配ご無用です。胸を張って寂しく無いと言うのは母さんに申し訳ないと思うけど、そこまで寂しい訳では無いよ。僕はもう中学生だしね。あつ、某お笑い芸人じゃないよ。

第一、僕は一人で家に残されてはいない。素敵なオバ、お姉さんがいらっしやいます。

『夏休みは、父さんも仕事を休むから、二人でキャンプしに行こう。P.S. 家政婦の田中さんにあまり迷惑を掛けないように。数学で赤点を取らないよう勉強を頑張りなさい』

父さんめ、余計な追伸を。メイドさんに読み上げさせなくて良かった。

それにしても、夏休みに父さんと二人でキャンプか。どうせ、仲の良い父と息子が、都会には無い大自然の中で、絆を深めるという父さんの夢のようなイベント計画だろうけど。そんな珍しい事をしたら、普段以上に何を話せば良いか分からなくなって、寡黙でぎこちないキャンプになりそうだ。ここはその暗いムードを払拭するため、是が非でもメイドさんにもついて来て貰おう。

「坊っちゃん！早くお風呂にお入り下さい！」

一階からメイドさんの声が聞こえる。

僕は、適当に返事を返してパジャマとメイドさんに貰ったプレゼントを持って部屋を出た。

何となく頭に残った父さんのメッセージの中の母さんの事を考えながら。

メイドさんと僕の出会い

今思うと赤面もの。僕はお母さんが好きだった。その甘えっぷりと来たらもう何ていうか。小学校高学年にもなつて平気で抱き着くし、行つてきますのキスをおでこに貰うし、時々、添い寝をして貰うし。うん、恥ずかしい限りです。あえて、その当時の己を貶めよう。重度なマザコンだったと。

そんな大好きなお母さん。僕が学校から帰つて来た時だった。リビングに倒れているのを見つけたのは。泣き喚きながらも何とか救急車を呼べた幼き僕と、仕事を放つぱり出して病院に駆け付けた父さんに医者は言つた。蜘蛛膜下出血で既に手遅れだと。蜘蛛膜下出血等、漢字さえ知らない僕にもお母さんが助からない事は十分に伝わった。その後、父さんが病院内で迷惑も顧みずに大音量で泣き叫ぶ僕を宥め落ち着かせ終える前に、お母さんはこの世から僕らを置いて旅立つて行つた。

まあ、それからの一ヶ月は大変だった。必死に仕事と家事と育児を果たそうとする父さん。そんな頑張る父の背中を見ながらも、父を無視し、お母さんを想い、一日中部屋に隠る馬鹿息子。

更には、女やもめに花が咲き、男やもめに蛆が湧く。家事なんて、結婚してからは、大分ご無沙汰だった父さんの奮闘虚しく、さすがに蛆は湧かなかつたけど、家の中は僕の心の中のように荒れて来る。

だから、父さんが住み込みの家政婦を雇う事を決めたのに、僕は反対はしなかつたし、反対する気力も無かつた。

僕が知らされなかつた、いや、聞き流していたのだろうその日、いきなり僕の閉め切つた部屋の扉は開かれた。

「この部屋の掃除をさせて頂きます」

ノックもせずに、人の部屋を開け放つ女性。カーテンを閉め切った部屋に差す廊下から入って来る明かり。その光を後光のように背にして立つ、掃除機とゴミ袋を手にした見知らぬ女性。

「ここに有るものは全て捨てて宜しいのですか？」

父さんが仕事で居ぬ間に、八つ当たりに盛大に暴れまくった残骸の散らばる僕の部屋を見て、眉をしかめながら言う女性。お母さんから貰った思い出の品々を捨てられるのはさすがに躊躇った僕。

「私には坊っちゃんの大切な物とそうじゃない物の区別は出来ません。坊っちゃんが、分けて下さい」

そして、それまで、自分の事すら何もやって来なかった僕は強制的に自分の部屋の片付ける見知らぬ女性を手伝う事になる。

その時、過ごした時間は不思議な物だった。父さんにも生返事しか返せなかった僕。

「私は本日より、この片名家で住み込みの家政婦、メイドをさせて貰う事になりました田中陽子です。宜しくお願いします。年ですか？何歳に見えます？三十代…、鋭い。友人には、これでもまだ二十代後半で押し通せると言われて言われてるんですよ」

何故か僕は久々に人と会話をしていた。しかも、会ったばかりなのに微笑しながら。

お母さんが消えて天国から地獄に堕ちた僕。僕を天国に救い出してくれたメイドさん。天使なんじゃないのか？その時は、確かにそう思ったんだ。

次の朝、定時に叩き起こされ、学校をサボり続けた手前、学校に行き辛いと半べそで駄々を捏ねる僕を、『行つてらっしゃいませ！』の笑顔と共に、家の外に放り出す、地獄の底から来た鬼メイドでなければね。

まあ、今思えばそれが僕の為には良かったんだろうけどさ。

これが、僕とメイドさんの波乱万丈、語るも涙、聞くも涙な出会いの話。

メイドさんと僕の授業参観

ただいま〜と中学生らしく元気良く玄関をくぐる僕。メイドさんのお帰りなさいませと香しき匂いがキッチンから流れて来る。今日は正にカレーでしょう。

全く中学生も楽しじゃない。毎朝、朝早く七時に起きて、通学。教師による、退屈な長話をメモしながら聞いたり、古くさい曲を歌ったり、全力で球蹴りに興じたり、名ばかりの囲碁部で友達と実の無い馬鹿話をしたりと。僕たちは大人は懐かしむハードスケジュールをこなしているのですよ。

そんな僕はお疲れ様な僕はリビング併設のキッチンでカレーを煮込んでいるメイドさんを横目で流して、教育的なテレビの忍者の卵が活躍するアニメでも見ようとテレビの前のソファにダイブして、白き低テーブルの上のリモコンを探すのです。

あれ、そのテーブルの上に、凄く見覚えのあるクシャクシャの紙が…。何故、これが此处にある？

僕の背後に差す影。

「坊っちゃん、部屋の掃除していたら、見付けてしまいました」

素敵な笑顔で僕の後ろに立っているメイドさん。息子の部屋で決して見てはいけない大人な本を見付けてしまった母親のような事をしているの？

「駄目ですよ、坊っちゃん？学校から家庭への連絡プリントを普段塵紙とお菓子の袋しか入ってないゴミ箱に捨てては」

甘かった。確かに普段、紙のゴミなど捨てられていない僕のゴミ箱に丸まったプリントを発見したら、見てみたくなるのがこのメイドさんの嵯峨。くそー、プライバシーの侵害だ。

「とにかく、旦那様にお話しませんかね。坊っちゃんの授業参観」

別に話さなくて良いよ。お父さんはきつとお仕事で忙しいし、それに、参観日に来てもらって喜ぶ子供は実際にはそう居ません。あれは、教師と保護者が、子供を緊張地獄に落ちるのを見て楽しむ悪夢のイベントなんだよ。

「いえいえ、我が子の学校で必死に勉強に励む姿を見れる良い機会ですよ。もし、旦那様が行けないようなら代わりに私が坊っちゃんの勇姿を是非拝見させて貰います」

そんなにその日だけ、必死に優等生のふりをする子供の姿がみたいものなのですか。いや、貴女のその悪魔の笑みは僕を苛めたいだけなのですね。勝手にプリントを捨てた事は素直に誤ります。だから、後生ですから来ないで下さい。

そんな僕の懇願などどこ吹く風なメイドさんが聞き入れてくれる筈もなく、父さんからもあつさりど、是非お願いするのお墨付きの許しを得たメイドさん。

普段来ている所を見たことの無い女物のスーツに、これまた普段全然しない化粧を薄くして、僕に軽く手を振りながら、ちゃっかりと保護者の列に収まっているのです。

「あれ、お前の母ちゃん？良いなあ、すげえ若くて美人じゃん」

始業のチャイムが鳴ってないのに、全員席に着き、こそこそ話に興じる学友達。そんな事は混じる気もなく、後ろを見ないことに必死な僕に、斜め後ろから小突いてくる悪友。全く間違えだらけで答える気にもならないから、そいつの顔を睨んでチラツとメイドさんを見て、無視を決め込む僕。僕にお母さんは居ません。メイドさんは別に保護者じゃないし、そこまで美人でも無いです。まあ、今は化粧してるけど、普段は化粧っ気一つ無いし、スーツ姿はバリバリのキャリアウーマンっぽく見えるけど、普段はＴシャツとジーパンしか着てない人だよ。しかも、お腹のお肉が気になり始めて、必死に腹筋を始める三十七歳の行き遅れ独身のおばちゃんです。今は、猫の皮を被って、虫も殺せなさそうな笑顔をしてるけど、家では僕をいたぶる…。

おっと、心の中でメイドさんの正体を暴露している間に先生が来てしまった。でも、保護者達の監視の中での不自由な休み時間よりは、数字と格闘してた方が、よっぽどましだね。授業をいつものように一所懸命に聞いているふりをしてれば良いだけ。まあ、参観日なんていつもと何ら変わりの無い授業だ。メイドさんが見ていようが見ていまいが僕には何の関係も無い。

まあ、先生がわざわざ僕の見せ場を作ってくれなければただだね。その僕の切ない望みも虚しく、黒板の前に立たされるもので。

背中に感じる、と思う視線。断言出来る。メイドさんがしっかりと見てる。当然だけどさ。

ノートをあたふたと何度も見て、チョークを折る格好悪い僕。この答えで合ってるよな？

うん、案外緊張するものなんだね、参観日って。久々だよ、こんな

緊張は。

「今日は本当に楽しませて頂きました」

学校からの帰り道、極度の脱力感に見舞われている僕の横を、含み笑いをしながら歩くメイドさん。そんなに僕の答えから0を抜くというケアレスマスなボケが面白かった？あれは、緊張に固まるクラスの雰囲気andra和らげる為の僕の慈善的行為でしてね…

「坊っちゃん、しっかり見直しをしませんとね？」

ハイ、そうですね…。なんかすいません。それにしても、メイドさん、大分御機嫌だね。僕がクラスの笑い種になったことがそんなに嬉しいの？意地悪なおばさんだ。

「結構、嬉しいもの何ですよ？子供の頑張る姿を見れるのは」

まるで、母親のような御言葉で。そんなに子供を苛めたいなら、早く結婚して自分の子供を作って苛めなさい。メイドさんに苛められ続けるなんて、僕はごめんだね。

「いえいえ、私はまだまだ坊っちゃんを苛め足りません。まだまだ私を楽しませて下さいね？」

はにかんだ笑顔で言われてもお断りします。主を遊ぶなんて、なんて酷いメイドだ。メイドさんの僕への酷い扱いには、もう馴れたから、今更文句は言わないけどね。

「さて、夕飯の買い出しに行きましょう。坊っちゃんが居るから、

今日は大量に買い込めますしね」

そう言って僕をスーパーへ先導するメイドさん。荷物持ちな僕に配慮して、適度な量にして下さい。

メイドさんと僕の恋

これは僕の普通な中学校生活の話。今日も特にいつもとなんだ変わりは無かった。僕がちよついと勇気を出して、それが徒労に終わったそれだけのいつもと変わらない日の話。

だから、いつもと違ったのは、放課後寄り道もせず家に帰っただけ。僕はいつも通りメイドさんの声のお出迎えに元気に挨拶して部屋に隠り、全然手の進まない問題集を広げて、いつも通りメイドさんの料理を食べて、いつもより早めにベッドに潜った。そして、そんな何の変化も無い日常に涙する。

普段、僕に何気に気軽に話掛けてくるあの娘。彼女は少なからず僕に気がある。多分、イけるだろうと樂觀視してた。体育館裏と言うベタで最高のシュチエーションを選んだつもりだった。僕は頑張った。それはこの日まで、幾晩も寝ずに考えた末に生まれたベタな決めゼリフを少し咬んだけど、それはご愛嬌だ。

僕に何が足りなかったのだろう。僕の何が悪かったのだろう。何もかもが足りなかったのだろう。何もかもが悪かったのだろう。僕の何もかもが否定された、そんな感じ。生きててごめんなさい。

「坊っちゃん、失礼しますよ」

返事も聞かずに失礼しないで欲しい。男の涙は見せてはいけけないのだ。

「坊っちゃん、学校で何かありましたか？」

廊下から射し込む電灯の光とメイドさんの妙に優しい声。

何も無かったと言うことにしておきませんか？

「学校で苛められたとか？」

僕の否定を信じる訳もなく、僕の眠る後頭部の近くに腰掛ける不屈き者。主人のベッドを不法占拠するメイドさんなんか、僕の赤くなっている眼など見せたく無いから、確認はしない。語る必要も無い。

「もしかして、フラれちゃいましたか？今日の髪の設定、気合が入ってましたものね？」

本当に言葉を交わす必要なく察しやがった。そのたまに見せる勘の良さで、僕の意気消沈を察して、今日はそっとしておいてくれないですか？

「そうですね。坊っちゃんも恋する歳になったんですねえ」

嬉しそうな声で、僕の頭を擦り出すメイドさん。拗ねたまま、やり過ぎそうと思っていた僕。思わず身体を起こす。恥ずかしいから止めなさい。

僕がやつと顔を上げてほくそ笑むメイドさん。何がそんなに面白いのですか？ええ、そうですね、僕は勇気と無謀を取り違えて暴走した愚かな男ですよ！

「坊っちゃん、失恋なんて誰もが経験するものですよ」

三十七歳独身な貴女でもですか？ええ、これは皮肉です。

「坊っちゃん、前にもお話したと思いますが、私はこう見えても、いえ、見た目通り引く手あまたなモテモテだったんですよ?」

その話は、僕の脳内裁判で陪審員の過半数の判決で嘘と可決しました。判決の決め手は、その歳でお嫁さんになれず、家政婦やつてる事です。

「生意気な事を。とにかくモテモテだったんです。そういう事にしておいて下さい」

そういうことにしておいてあげます。ところで、そろそろ僕は寝たいんだけど。メイドさんの自慢また今度、気分の良いときに聞いてあげますよ。

「そんな周囲の男達の高嶺の花だった私。ラブレターやプロポーズなんて腐るほど貰った訳です」

ハハハ、そうですか。大層モテたんですね。それはそうといい加減に…。

「でも、全部断りました。私、好きな人が居たんです。とても素敵な人でした。でも、その好きな人からはいくら待てども、何も無かったんです。その人にも好きな人が居ましたから。それは、私の横に居た友達でした」

メイドさんが寂しそうな眼で笑いながら、僕の顔を見ている。そんなメイドさんの顔を見ているとこの話が即興の作り話だと思えなくなってしまう。

「ねえ、坊っちゃん。人は誰を好きになってもいいんです。それは

「この世界の誰もが与えられた権利ですよ」

その好きな気持ちを伝えた結果が今日の惨劇なんだけど？

「坊っちゃん、そのお相手も誰を好きになっても良いんです。坊っちゃんだけが自由に恋をして言い訳じゃないですよ」

つまり、お相手は僕の事が好きじゃなかったという結論に再びたどり着く訳ですね。遠回りしてまた、僕に屈辱を味あわせてくれてありがとう。

「違いますよ。坊っちゃんが誰を好きになるのも自由、お相手が誰を好きになるのも自由。だから、坊っちゃんが好きだと言うのは、自由なのです。それが通じ無かったとしても、坊っちゃんがそれを恥じる必要は全く無いのです。それよりもその人を好きになれた事を誇りなさい。それは大変素晴らしい事なのですから！」

何が素晴らしいのかは全然分からない。でも、胸を張って言うメイドさんに、フラれたぐらいで不貞腐れていた僕が恥ずかしくなってくる。そう、ただ僕は自由に彼女を好きになっただけ、それだけの事じゃないか？

「大丈夫。そのうち、坊っちゃんも素敵な人に好かれますよ。素敵な女性代表の私が言うのですから、間違いありません」

かなり当てにならない予言だね。嫁ぎ遅れた女性代表じゃあね。

「心配ありませんよ。後、十年経って、坊っちゃんがイケメンになっても、素敵な人が出来なかったら、私になってあげますから」

ワオ、嬉しいね。でも、僕の自由に恋する権利をフル活用させて貰いたい。四十越えたおばさんは、僕のストライクゾーンを大幅に外れた大暴投。今から、十年若返って、モテモテになってから出直して来なさい。そうしたら、デートぐらいしてあげるよ。

「口の悪い餓鬼ですねえ」

口の悪いメイドは、そう言っただけで僕の頭を軽くもみくちやにした後、お休みなさいの一言と共に去っていく。

メイドさんが僕の恋人ねえ。

有り得ねえ！

似合わない過ぎるので、そんな馬鹿な想像は消し去って、さっさと寝てしまおう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1312o/>

僕の家メイドさん

2010年10月16日13時37分発行